て、手にすくへば、其雫で濁つて、思ふやうに飲みがたいものぢやから、あかでといひかけたのぢや　さて其あかでといふをうけて、名殘が盡きないで別るゝ事よナア」と歎じたので　何の巧も趣向もなく、只其の見る所のさまを序でゝ、調をのどめた處に、茫然としてだゆたふやうな樣子がおのづと出られて　丁度「淺香山かげさへみゆる山の井のあさくは人をわがおもはなくに」といふ歌と同じぢや　これらで歌は風調が大事であるといふ事、又序歌といふものゝ妙處をも知るべきである、

道にあへりける人のくるまに、物をいひつきて、わかれけるところにてよめる、

とものり

下の帶のみちはかたゞ〳〵わかるとも行めぐりても逢はむとぞ思ふ、

「詞書に、人の車とあるは、女車であらうと古來の說ぢや　「下の帶」とは、束帶には上下に帶をする事で、其下のをいふ　偖帶の端は兩方に分れて、廻して合ふものぢやから、其緣語でいうたものぢや　此「下の帶の」は枕詞といふ說は誤で、帶の端はかたゞ〳〵に分るゝ物ぢやから、道といふを隔てゝ、かたゞ〳〵分るといふにかけていふものぢやと古人の說ぢや、○今此通路は下の帶のやうに、かたがたに相別れてゆく事なれども、つひに又めぐり〳〵て、一緒に相合はんとおもふ事である」といふので　いかにも手際に緣語を用ひたものである、

古今集詳解離別卷之八　終

古今和歌集卷第九

羇旅歌

もろこしにて、月を見てよみける、　安倍仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なるみかさの山に出でし月かも

この歌は、むかしなかまろを、もろこしに物ならはしにつかはしたりけるに、あまたのとしをへて、えかへりまうでこざりけるを、此國より又つかひまかりいたりけるにたぐひて、まうできなむとて、出たりけるに、めい州といふところのうみべにて、かの國の人うまのはなむけしけり、よるになりて、月のいとおもしろくさし出たりけるをみて、よめるとなむかたりつたふる、、

仲麿は、元正天皇靈龜二年遣唐使に隨つて、留學生として唐に行き、竟に唐土で終られた人ぢや　此左注は取られぬ説で、詞書の通り、ひろく唐土でよんだものと見る方がよい、と古人の説ぢや　「天の原」は天といふこと　原はすべて茫々と廣い所をいふ名で、野原、海原の類ぢや　「ふりさけみれば」は、遙に見ることを「春日なる三笠の山」は、奈良の京の東で、仲麿は奈良の京の人故、常にこゝから月の出るのを見たのぢや、○茫々たる空を、遙かに仰ぎみれば、月がすみ渡つてをるが　此月は、あの吾が常に見た、春日なる三笠山に出た月であるか、マア、といふので　さて〳〵なつかしい事よ、戀しい事よといふが餘情ぢや　見るもの、聞くものゝこと〳〵く異なる外國に在て、只月ばかりは本土で見た影とかはらぬを見て、忽ち平常みしさまを思ひ出したる感情が限がない　故郷とも、我國ともいはず、直ちに「春日なる」といふたところに、その感情の切なるさまがみえるのぢや、

おきの國にながされける時に、船にのりて出たつとて、京なる人のもとにつかはしける、

小野たかむらの朝臣

篁が罪を得て流されたは、仁明天皇の承和中の事ぢや、

わたの原八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよ海士の釣舟

「わたのはら」は、渡の原で、海のこと　わたはわたつみのわたと同じぢや　「八十島」は八十島といふ名の島ではない　又實數の八十といふでもない、只數多くの島といふことぢや　「かけて」は、こゝからかしこへ及ぼすこと　篁は難波津から、乘船する事ぢやから、隱岐へゆく迄の海上には、多くの島々を廻つてゆく事をいふのぢや、○はてもなき海上に今より先過ぎ行くべき數多くの島々をかけて心細くも今日漕出でたといふことを　故郷の人に告げて呉れよ、あゝあの蜑の釣して居る舟よ」といふので　「蜑の釣舟」は只其眼前見る所のものに依ていうた迄で、もとより深い意義があるではない　只かやうにいひやりたいとおもふ情を、眼前見る所の釣舟によせていうたものと、輕くみるべきである　之につきてかれこれやかましくいふ説は、皆よろしくない　「人には」のは、感歎の辭で、てにをはではない　人に告げよといふまでの意ぢや　今日とは違つて此時代は、海路攝津から隱岐までは、多くの日數を要するは勿論、危險

の顧慮も少からず　且流罪に處せられて、茫々たる海上に乘り出す時の心地、實にいかばかりであらうか　其情を思ひやつて、此歌はみるべきである、

題しらず　よみびとしらず

みやこ出てけふみかの原いづみ川風寒しころもかせやま

甕の原　泉川　鹿背山　いづれも山城國相樂郡ぢや、○都を出立してから、今日で僅に三日目ぢやに、みかの原　いづみ川　あゝ川風が寒いことぢやが旅で着物の用意もないから、貸てくれよ、かせ山よ」といふので　みかの原　いづみ川　かせ山と重ねていふ語調におのづとその歴々見渡す旅路のさまが出られ　又下の句のさまけふみかの原の詞に應じて、晩秋旅衣に寒く吹來る風のさまもおもひやられて、誠に感の深い歌ぢや　偖此一二句京より近き土地で、もとより三日など費すべきでないから、都出でゝ今日三日とつゞけたではない　今日見るといふのぢやといひ　又旅には都を立つてから今日で幾日など算へるが、常ぢやから、やがてそれを枕詞としたので、實際の日數を問ふべきでないといふ說もあるが、共に從はれない　よしや近い場所なればとて、時節の模樣、事がらの都合で　例へば巡回などいふ事ならば、三日なり、四日なりを送る事のあるは常の事ぢや　それでいうたので、今日見るとかけたでないといふは語勢で明かに出られ　又枕詞でもなく、實際都を出てから今日で三日目といふを、甕の原にいひかけたものぢや、

ほの〳〵とあかしの浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ

この歌はある人のいはくかきのもとの人まろがなり、

この歌は、後世の人が、人麿の歌ぢやといふは、この左注によりての事ぢやが人麿でないといふことは、歌がらでたしかにわかつてゐるといふ事は、先哲が皆いうてゞある　今昔物語第廿四卷に、小野の篁が流される時、明石に、宿つてよんだ物ぢやというてあるが　歌がらが何さま其時代の物と思はれるから、篁の歌ぢやらう、と打聽にも、遠鏡にも、いうてある其とほりぢや　たゞし今昔物語には篁が明石に宿つた夜、明がたに海を眺め、船の島隱れゆくを哀とみてよんだとあるが　此れは傳のあらいので、此船は親族とか、友人とか、さらぬも必ず篁に關係ある人の、乘て出た船と思はれる　それは「舟をしぞ思ふ」といふ

言葉でしられる事は、つぎにいふとほりである「ほの〳〵と」は、夜の明けぎは、の、段々あかるくなつてゆくけしきをいふ「あかしの浦」は播磨國「島がくれ」は、島蔭に入ること「舟をしぞ思ふ」は舟惜しといふではない、舟をぞ思ふといふので　しはつよめの辭、舟をぞ思ふといふを、このしを加へてつよめた物ぢや　ぞ思ふといふ詞ばつよくいひする詞ぢやのに、此のしを加へる時は、尙一層つよくなつて、おのづと深い感情がふくまれ　或はかなしく、又はなさけなく、どうもたへられんといふやうな情がこもる詞となる事、次の「旅をしぞ思ふ」とある歌でも知られる事である　古來この歌を十分にときえないのは、つまりこの句をときえないからである、○ほの〳〵と夜が明けてゆく明石の浦に、立渡る、朝霧をこぎ分け、淡路島の陰に入りて、段々と見えなくなるあの船がサ　われらはあはれに、名殘をしく、悲しく、どうもたへがたく思はれる事である、といふので　あゝみえなくなつた、あゝかくれて去まうたが言外ぢや　此歌の解には、古來二説有つて、一は自身が船の中に在て、明石の浦の方を霧隱れから見てよんだ物ぢやといふのぢやが　是は此歌が羇旅の部にあるから、陸上から見てよんだものとしては、眺望の歌となつて、旅といふに適はぬから渡海と見ての事ぢや　なれども「島がくれゆく船」といふつゞけがらがどうしてもさうは聞えない　からして一説に、旅する人が陸上より海面を見て、蜑の帆舟のたゆたふさまを見て、都に目馴れし目から珍しがりて、よんだぢや、といふが　それでは只景色を愛するのみの事となつて、「船をしぞ思ふ」の句が解き得られぬ者となる　「船をしぞ思ふ」と深くいひおさへて歎じたるさま、何として只景色が珍しく、面白いといふばかりのものであらうぞ　又さやうにみてはたとへ旅客がよんだものとしても、亦猶眺望の歌で、旅情も別にみえず、且歌がらも平凡のものとなる事ぢや　此句中には前にいうた通り、深い感情がこもつて、一首の精神全くこゝにあるもので　親族もしくは友人等の船の、島がくれゆくを望みて、いかにも心細くたへがたくおもふといふ旅客の情、全く此句で知られるである　さて此歌を古來玄妙のものとして、公任卿は三年までかんがへられたなどいふて、至極むづかしい事にいうてある事ぢやから　今は稍くばしく云ふ事で、右に申した通り、別にむづかしい事もなく、只いかにも感

情の深い歌であるのぢや、

あづまのかたへ、友とする人ひとりふたりいざなひていきけり、三河國八ッ橋といふところにいたりけるに、その川のほとりに、かきつばたいとおもしろくさけりけるを見て、木の陰におりゐて、かきつばたといふいつもじをくのかしらにすゑて、旅の心をよまむとてよめる、

在原業平朝臣

此集の詞書は概して簡古なるに　唯業平の歌に限りて、往々長いものが見えるは、後人がさかしらに伊勢物語の文に依て改めたであらう　其證は此詞書なども物語の文と稍同樣ぢやが處々を省略したから文脈が通らんで拙いものに成たでもわかるとの由　正義に委しく論ぜられたは、至極の說である　此詞書なども、もとは極簡單に唯都に遠き旅路でかきつばたを見て、それを句の頭において旅の歌よめと人にいはれてよんだよしのみあつたであらう、と同書にいふ通であらう　此伊勢物語の文は伊勢物語の解議で委しくいうてあるから今は略していはぬ事である、

から衣きつゝなれにしつましあればはるゝきぬる旅をしぞおもふ

「からころもきつゝ」は馴にじつまといふ詞をおこさん爲の序歌で　衣類は着馴すものぢやから、馴れし褄を、馴れし妻にいひかけたぢや　つましのし、旅をしのし、共につよめの辭、旅をしぞ思ふ」は「船をしぞ思ふ」と同じ格で「旅の空の悲しく、心細くどうもたまらぬといふ情がこもつて居る詞「はるゝ」は遙々の詞を衣の緣語からいうたものぢや、○から衣をきては、着ては、段々とき馴し褄の馴れし妻が京に殘りて居る事ぢやから　遙かにかく遠方なる旅に在ることが、いかにも悲しく心細くて、どうもたとへられぬ事である」といふので

何の頭にかきつばたといふをよみ入れた歌で之を折句といふである」

さて又此歌、からころも云々と長く詞をつゞけて序歌の體とし　それをうけて、はるゝ」というたところ口調の上におのづとはるかなるさまが、知られて、面白いぢや　こゝが序歌の妙處である、

むさしの國と、ゐもつぶさの國との中にある、すみだ川のほとりにいたりて、みやこのいと戀しうおぼえければ、ゐばし川のほとりにおりゐて思ひやれば、かぎりなくとほくもきにけるかな、と思ひわびて、ながめをるに、わたしもり、はや舟にのれ、日もくれぬ、といひければ、船にのりてわたらむとするに、みな人ものわびしくて、京におもふ人なくしもあらず、さるをりに白き鳥の、はしとあしとあかき、川のほとりにあそびけり、京には見えぬ鳥なりければ、みな人見ゐらず、渡し守にこれは何鳥ぞといひければ、これなむみやこ鳥、といひけるをきゝてよめる、

此詞書も、物語の文を省略したもので、もとはこれより遙に簡單なものであつたらうと正義の説ぢや、

名にしおはゞいざことゝはむみやこ鳥わが思ふ人はありやなしやと

「名にしおはゞ」は其名に呼ばれて居る如くならば、といふ事で、即ち名稱通りならの意ぢや　名高いといふを「名にしおふ」といふは是から轉じた詞ぢや　「ありやなしやと」は無事であるか、否やといふことで、即ちどうしてをるかとの意之を存生して居るか死んだかの意ぢやといふ説はよくない、○名稱に呼ばれて居る通りであるならば、サアものを問ひ尋ねて見やう、あの都鳥よ　我らが深く戀しく思うて居る人は、どうして居るかといふ事を」といふので　都鳥といふからは、定めて知て居るであらう、が言外ぢや、

題しらず　よみびとしらず

きたへゆく雁ぞなくなるつれてこし數はたらでぞかへるべらなる

此歌はある人男女もろともに人の國へまかりけり、をとこまかりいたりてすなはち、みまかりにければ女ひとり京へかへ

りける道に歸る雁の鳴けるをきゝてよめるとなむいふ、

此歌は左注の趣でよくわかる、○北の方へ歸り去る雁がなきつゝ行く事であるよ　あの雁も一緒につれ立つて來た數が、不足して歸るでもあらうか、それでおのやうになくであらう」といふので、我等のやうにが言外ぢや　これらの歌後世では我が如くなどいふ事を心一首のうちに入れる事ぢやが、それでは却て感情が減ずるのぢや　歌は感情をあらはすもので斷るものでないといふ事、これらの歌でしるべきである、

あづまのかたより、京へまうでくとて、道にてよめる、

おと

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれみやこのさかひなるらむ

これは東國より京へかへる時の歌ぢやらうと古人の說ぢや　「京へまうでくとて道にて」といふ詞書、京近くに來つたさまが去られる　即ち京の山々をも望むべき地に來つたのぢや、○こゝではモウ京の山がみえる筈ぢやに、立かくして見せぬ春霞がサ、誠に恨めしい、どこが京の境となる事ぢやらう」といふので　山を見たく思ふは片時も早くかへりたく思ふからの事で、其情が一吟の上におのづと去られるぢや、

こしの國へまかりけるとき、ろら山を見てよめる、

みつね

きえはつる時しなければこしぢなるろら山の名は雪にぞ有ける

消えて去まうといふ時はなく、年中雪がつもつて眞白にみえる山ぢやから此越路の白山といふ山の名は、畢竟雪からおうたものでサあつた」　この歌別にかはつた趣向もないが、口調さら〳〵として姿が高い歌である、

あづまへまかりける時、道にてよめる、

つらゆき

糸による物ならなくに別路のこゝろぼそくもおもほゆるかな

「糸による」は、糸はこれと彼とを縒り合するからいうて　偖糸は細いものぢやから心細くとかけたぢや　別路はこれと彼と別るゝところで、糸によるの縁語　又道の狹い事を細いといふ　心細いは糸と道とにかけていうたものぢや、○糸といふものは此と彼とを縒り合せるものぢやが　さやうに此彼より合せるものでもないのに此と彼との別れてゆく道は、誠に心細く悲しく思はれる事でもある事かいなア」といふので　誠に巧に縁語をつかうて、あはれによんだものぢや　徒然草に此歌を古今集の歌屑とみえて居るは、論にも足らぬ事で　徒然草時代は歌學問は殊の外に衰へた事故、歌論は取りがたい事は別に論じておいた、

かひの國へまかりける時、道にてよめる、

みつね

夜を寒みおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

躬恒が甲斐少目で赴任した道中の詠ぢや　昔の旅は草を結んで枕としたから草枕の名があることは、已にいうた通りぢや、○夜が寒くて初霜がはやおきはじめたから、其初霜を拂ひつゝして、草の枕の侘しく心細い床に幾晩もゝ多く寢た事であるといふので　さてゝ旅といふものはいつらいものぢやが言外、

たぢまの國のゆへまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりのかれいひたうべけるに、ともに有ける人々歌よみけるついでによめる、

藤原かねすけ

夕さりのかれいひは、夕飯といふ事　かれいひはほし飯で、此時代旅ではほしいひを用ひたのぢや、

夕づくよおぼつかなきを玉くしげふたみのうらはあけてこそみめ

「玉くしげ」は、ふたみにかゝる枕詞　これも例の薄月夜で遙かに遠く見渡した

やうな趣が、此枕詞のうちに匂ふのぢや　二見の浦は、伊勢にも但馬にもあるが、こゝのは播磨の國ぢや　さて此歌は、共に歌をよんだ人の中に此夕月に濱手を散歩して景色をも賞せんなどいひしものあるに對してよんだものらしい、〇夕月夜の光が薄くぼんやりとしてはきともみえぬ事ぢやから　あゝあれあの二見の浦の景色をば、夜が明けてからサ見るやうにせう」「あけて」は玉くしげの緣語ぢや、

これたかのみこのともに、かりにまかりける時に、あまの川といふところの川のほとりに、おりゐてさけなどのみけるついでにみこのいひけらく、かりしてあまのかはらにいたるといふ心をよみて、さかづきはさせ、といひければよめる、

ありはらの業平朝臣

かりくらしたなばたつめにやどからむ天の河原に我はきにけり

此端詞も伊勢物語の文をとりて作つた、後人のさかしらで、大樣歌に關係がないと正義にあるが、其通りぢや　唯惟喬親王の御供で河内國交野へ行きたる時の歌とみてあるべきぢや　天の川は交野にある川の名ぢや、〇けふは終日此交野に狩をして暮した事ぢやが、いつかどうか道に迷うた事とみえて、天の河原にわれらは來てしまうた　天の川とは、天上にあるもので、そこには棚機つめといふものがあるといふから　そんなら今夜は其棚機つめに宿をかりて、ゆる〳〵語ること〳〵せう、

みこ此歌をかへす〳〵よみつゝ、かへしえせずなりにければ、ともに侍りてよめる、

きのありつね

一とせに一たびきます君まてばやどかす人もあらじとぞ思ふ、

「一とせに一たびきます君」とは、彦星をいふ　宿かす人とは棚機女の事ぢや、〇いや〳〵一年一回御出でになる牽牛星を待つてをる事ぢやから、其外の人が宿をからうというても、貸すことはあるまいとサ思はれる、といふので　この

君といふを惟喬親王の事としてといた説もあるが、それは宜しくない、

朱雀院のならにおはしましける時に、手向山にてよめる、

すがはらの朝臣

「おはしましける」は、御幸と云ふ事で、そこにおいでになつて居るといふのではない「手向山」は奈良坂の上を云ふのぢや、

此たびはぬさもとりあへず手向山紅葉のにしき神のまに〳〵

御幸供奉の時の歌ぢや「このたびは」は「此度は」に此旅といふをかけたのぢや菅公は高市郡に山荘が有た事故、平常たび〳〵往復せられたであらう　其に對して此度此御幸の供奉の事を「このたびは」といはれたである、と古人の説ぢや　偖前にもいふ通り、常の旅行には幣を用意する事なれども、今度は供奉ぢやから用意せぬのぢや「とりあへず」は取るに暇がないといふ意と、其儘すぐにといふ意とを兼ねて云うたもので　幣を取るに暇がないというてそれ故すぐ其儘之を手向けるといひなした詞ぢや、○今度の旅には供奉であるから幣帛もとりあへない事であり升、それ故すぐ其儘是を手向にします　此手向山の紅葉は、今眞盛りで、丁度錦のやうであれば、神の御心次第でありませうからといふぢや　諸説幣もとりあへずで句をきうて、只取るに暇がないといふ事にみたのはよくない　とりあへず手向山とつゞけて、直ぐ其儘之を手向とするとかけた所がてぎはの事で、此歌の面白みは專ら此所にあるのぢや雜上「さかさまに年もゆかなんとりもあへずすぐるよはひやともにかへると」これと同じ用ひざまである、

たむけにはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ

素性法師

「つゞりの袖」は、天竺の古の僧の衣は、こゝかしこにて、絹布の切々を貰うてきて、綴つてこしらへたものぢやからいふ　後の袈裟を色々につぐもそれから起つた事ぢや　是が衲衣ぢやと打聽に見えて居る、即ち僧衣の事である、○神へ

の手向のためには僧衣なりともきりきざみて、幣として奉るべきなれども
かやうに美しい紅葉の錦にあきたりて御座る神ぢやから、御うけ入れはなく、
御返しなさる事であらう」といふので　われらが僧衣のやうにつまらぬもの
は、が言外ぢや　偖きる」といひ「かへす」といふが袖の縁語である、

古今集詳解羇旅巻之九　終

古今和歌集巻第十

物名

「ものゝな」とよむ　又これを「隠し題」ともいふは、題を歌詞の中にかくし入れて
よむからの事ぢや、

藤原としゆきの朝臣

うぐひす

心から花の名づくにそほぢつゝうぐひずとのみ鳥のなくらむ

「花の雫」は、花におく露のこと　「そほぢ」は、濡れひたるをいふ　「愛く乾ず」に鶯を
入れたのぢや、○自身の心からで、花の間をくゞり傳うて、其露に濡れひたりつ
〳〵しながら、愛く乾ない事よとばかり鳥が鳴くは　何とした事であらう、人
のさせる事でもないのに」といふので　「うくひずとのみ鳥のといふ詞づかひ
のうちに、おのづと何ゆゑとがむる情が生ずるぢや、

ほとゝぎす

くべきほどときすぎぬれや待わびてなくなる聲の人をとよむ

る。

「時すぎぬれや」は、時すぎぬればにやといふこと　「人をとよむる」は、打聽に、彼が鳴音をめづるにつけて、人のいひ騷ぎ思ひ鳴ぐをいふとある通り　世間の人に賞翫せられるをいふ、「とよむる」は動ましむるぢや○來り鳴くべき程合の時分が過ぎおくれたればにや　たれも〳〵待ちこがれて、その鳴く聲が一般世間の人をして、さわがしいまでに賞翫せしむるであらう」といふのぢや　一說に郭公が待つ妻の來たるべき時のすぎてこぬから、といふ說もあるが　おのがつまとも何ともなくて、只くべき程とのみあるからは、左樣にはいはれないにいうた通りである、

又郭公の聲を賞翫して待侘るは、時代時一般の風習であつた事、かた〳〵、右

在原なげはる

うつせみ

涙のうつせみれば玉ぞみだれけるひろはゞ袖にはかなからむ

や

「うつせみ」は、もと現身といふを、通音からうつそみ」とも「うつせみ」ともいうた事で、生きて居る身といふぢやが　平安朝となつては、蟬の事を空蟬ともいふことなつたである　偖前二首はおの〳〵其鳥の事を歌にもよんだものぢやが　この贈答は只詞をよみ入れたばかりで、歌の意は別の事である、○浪が打寄せる河の瀨を見れば、多くの玉がサ散り亂れて居る事ぢやが　此玉を拾ひとる事ならば、袖にはかなく消えて去まふ事であらうか、どうであらう」と問ひかけたぢや　此「はかなからんや」といふを問かけたではない、はかなからんよと歎息したぢや、といふ說もあるが　次のかへしの歌と對照してみれば、矢張問かけたものに相違ないのぢや、

かへし

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみ

むかし

壬生忠岑

いや〳〵、袂からして、離れては、何として玉を包むことができやうぞや　ぢや

からやはりこれがサ、それちやとて袂へうつされよ、我等見やうからにサ」といふので　袖にはかなからんやの問に答へたのぢや、

うめ　　よみ人しらず

あなうめにつねなるべくも見えぬかな戀しかるべき香はにほひつゝ

これは歌にも梅の事をいうたぢや「常なるべくも見えぬ」は、其儘平常かはらず有りそうげにも見えぬといふ事で、花をいふのぢや　之を梅花のうつろひがたをいふとの説もあるが、從はれない　移ろひがたといふ事、詞の上にみえないからぢや　故に只廣く花のさまをいうたものとみるべきぢや○ああ憂いことよ、目に見たところがどうも其儘平常あるべくもみえぬ花のさま哉　去かも後々戀しく思はれさうな香氣に匂ひつ匂ひつしてサ」

かにはざくら　　つらゆき

かづけども涙のなかにはさぐられで風ふくごとにうきぞつづむ

玉

「かには櫻」は、山櫻の一種で、「かばざくら」と同物ぢや　これは歌の意は別物で海人が水底にくゞり入るさまについていうたものぢや、「かづく」は海人が水に入るをいふ、○海人が水の中にくゞり入れど、浪の中では探り取るといふ事は出來得なくて　風がふいて、浪がくだけちる度々に、浮たり沈んだりするあれあの玉はよ」といふので　浪のとびちるを玉と見たてゝよんだのぢや、

すもゝのはな

今いくか春しなければうぐひすもゝのはながめておもふべらなり

これも歌は別物ぢや、○モウ幾日といふ程も、春はサない事ぢやから　われば かりぢやない、あの鶯も、ぼんやりとして、春の名殘を惜むやうなさまに思はれる」といふので　どうもその鳴ぶりがいかにもものうげに聞える、が言外ぢや、

からもゝの花　　ふかやぶ

あふからものはなほこそかなしけれ別れんことをかねて思へば

「からもゝ」は、杏の古名ぢや　これは戀歌によみなしたものぢや、○逢うたからには嬉しく思ふべき筈ぢやのに、猶矢張サものがなしく思はれる事であるわい　それは逢うたからには、亦必ず別るゝ事があるといふを、前以て思ふからである」　猶は一層といふではない矢張といふ事ぢや　昔の猶といふは皆さやうぢや、

たちばな

あしひきの山たちはなれゆく雲のやどり定めぬ世にこそ有けれ

をのゝ忘げかげ

これはもと詞書に「やまたちばな」とありたるを、やまをおとしたぢやらう、と古人の説ぢや　「足引の」は枕詞　さて上の句は、「やどり定めぬ」といふをおこす序歌ぢや、○あゝあの遙かにみえる山の峰を離れて、茫々たる空へたゞよひ行く雲の　どこへとまり、どこへおちつくともわからぬ、人の世のありさまである

とかい」　上の句は只下の句をおこすまでの序ぢやが　此序でおのづと人世の便なく、こゝかしこにたゞよふやうなさまがしられる處が、例の妙なのぢや、

をかたまの木

みよし野のよしの〻瀧にうかび出る沫をかたまのきゆと見つらむ

とものり

「をかたまの木」は詳かでない　日向國高千穗山に限りて生ずるもので赤い實の結ぶ木ぢやとも　又招玉の木の轉音で、賢木の事ぢやともいふが、いづれも證據がない　昔はこれを古今三木三鳥の中の一木として、ことごとしくいうた事ぢやが、それにも確説はなかつたぢや　つまりわからぬものはわからずとせうより外しかたがない、さてこれも歌は別物ぢや、○芳野の川の瀧津川瀨に浮び出でゝはうせゆく水の泡をば、誰が玉の消ゆるものと見た事であらう、」といふので　似てはをれども泡は失張泡ぢやものとが言外ぢや　これを誰

も泡とみるぢやらう、と説くは語氣を十分に味はゝぬからで、左樣にはどうしてもいはれないぢや、

やまがきの木　　よみ人しらず

秋はきぬ今やまがきのきり〴〵すよな〳〵なかむ風の寒さに

「やまがき」は柿の一種、鹿心柿といふものぢや　これも歌は別物ぢや、○秋が來た事である、もうはや垣ねのあたりできり〴〵すが、毎晩々々なくやうになるであらう、風が寒くなるに依て、

あふひかつら

かくばかりあふひのまれになる人をいかゞつらしと思はざるべき

葵と桂との二つで、共に加茂祭の時用ふるものぢや　これは戀歌としていうたものぢや、○かほどまでに逢ふといふ日のたまさかになつた所の人を、何として辛いなさけない事と思はずにはゐられやうぞやといふので　實にな

さけない事ぢやが言外、

人めゆゑ後にあふひのはるけくはわがつらきにや思ひなされむ

これも戀歌ぢや、○人目を憚る故に、此後もしも逢ふ事が遠ざかるやうの事があつたならば　其譯を知らんで、唯わが心がつらいからとばかり先方では思ひとる事であらうか」といふので　さて〳〵困つたものが言外、

くたに　　僧正遍昭

ちりぬれば後はあくたになる花を思ひ去らずもまどふてふ哉

「くたに」は苦丹の字音で植物の名ぢや　梔子花とも牡丹ともいへど慥にはわからぬ　これは直ちに其花の上をいうたものである、○散つて去まうた後には塵芥となりゆく花を、さやうとも思ひ去らないで、つきまとうて戀ひ去たふ蝶々でもあるかマア」と歎息したので　物に執着して解けがたい人情をたと

さうび　　つらゆき

われはけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

薔薇は、即ち「うはら」で、「ばら」の事ぢや　「うひ」は初といふこと、これも直ちに其花をよんだものぢや、○我等は今朝初めてサ見た事である　此薔薇といふもの の花の色合ありさまを、何さまあだめいてはかないさまをしたものといふべきである」といふので　これは薄紅の薔薇をいうたもので、其色のあだめき且花の脆く散りやすいをいうたのぢや　昔は薔薇は、今のやうに種類が多くはなかつたもので　且此時代は尤少かつたものとみえるといふは、此歌のうひにぞみつるとあるのでも、しられる事ぢや　偖又此歌を一般の花の事として説くはよくない　薔薇の花についていうたといふは明かである、

をみなへし　　とものり

白露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にも糸をみなへし

「さゝがに」は、笹蟹ぢやとも、小蟹ぢやとも、二説ぢや　蜘の事をいふ名　これも女郎花を直ちによんだものである、○白露を玉として貫き通さんがためにとてや　蜘が女郎花の花にも又葉にもすべて皆糸を引かけ渡した事ぢやらう、

朝露を分そほぢつゝ花見むと今ぞ野山をみなへしりぬる

これも女郎花を直に讃だものぢや、○朝からして家を立出て、たく白露に袖やもすそを分ぬらしつ分けぬらしつして　女郎花の花を賞翫しつゝ、あちらこちらとあるいて、今日ハサ其爲に野をも山をもすべて皆經歷した事であるわい」「花みんと」は、一般の草花の事ぢやといふ説もあるが　去かしをみなへしのかくし題ぢやから、やはり其花としてみる方が穩かであらう、

朱雀院のをみなへしあはせの時に、をみなへしといふいつもじを、くのかしらにおきてよめる、　つらゆき

をぐら山みね立ならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

これは折句ぢや　小倉山は山城、立ならしは立馴しるといふ事ぢや、○小倉山

の峰に立馴れて勝手をよく知つて鳴く鹿は年々あの通りになく事ぢやが
これ迄どの位の年數を經過したる事といふを、知つてをる人が、サない事ぢや、

きちかうの花　とものり

あきちかうのはなりにけり白露のおける草葉もいろかはりゆく

「きちかう」は桔梗の字音、今の「ききやう」の事ぢや　これは歌は花の事ではない、
○秋が近いさまに、野邊の景色もなつた事であるわい　あの白露がおき渡してある草の葉も、モウ何となく色がかはつて、是迄のやうに青々と勢さかんにはみえないことぢや、

よみ人しらず

ふりはへていざ故郷の花見むとこしをにほひぞうつろひにける

紫苑の字音ぢや　これは紫苑を直ちによんだもの「ふりはへて」は、わざ〳〵

といふ事○わざ〳〵と、サア故郷に咲いてをる紫苑の花を見てこやうとて、來た事であるのに來て見れば、はや花は末になつて、いろあひありさまがサ、かはつて去まうた事であるわい、

友のり

りうたんのはなわがやどの花ふみ去だくとりうたんのはなければやこゝにしもくる

「りうたん」は龍膽で、今「りんだう」といふものぢや　「ふみ去だく」は、足で踏みあらすこと　「とりうたん」鳥擊たんといふので花ふみ去だくを深く憎んでいふ詞
○我家の庭に美しう咲いてをる花を踏あらすあの鳥よあゝ憎い事ぢや、擊てやらう　野はない事かや、どこにも澤山ある事ぢやのに、とかくにこゝにばかりきをる事よ　この解諸説すべて當を得ぬ　「鳥うたん」を鳥逐はんの意とし「のはなければや」を、野はない故にやと說き　又は野に花がないからにやといふ類　皆よく思はぬからの說ぢや　右にいふ通り、「鳥擊たん」は深く憎み憤

りていふ詞「野はなければや」は、野はない事か、どこへ行てもある事なるに、といふ意ぢや「こゝにしも」の、しもといふに着目してみるぢや　どこへ行てもある事なるに、こゝにばかりくると憤りていふのぢや、

をばな　よみ人しらず

ありと見て頼むぞかたきうつせみのよをばなしとや思ひなしてむ

歌には世の中の有爲轉變なる事をのべたのぢや「うつせみの」は枕詞　これに例の千變萬化はかりがたいといふ情がこもつて聞えるぢや、〇有るものを有ると見て、それを頼からサ、案外な事もおこるぢや　千變萬化はかりがたい世上のさまをば、只すべてない者ぢやと思ひなしてあるべき事とおもはれる、」

けにごし　やたべの名實

うちつけにこしとや花の色を見むおく白露のそむるばかりを

「けにこし」は牽牛子の字音で木槿の花の事ぢや　歌は即ち其花の事をよんだものぢや「うちつけに」はさしあたりたゞちにといふ程の意「おく白露の染むる」とは花の色は露が染めたものではないけれど、紅葉など露が染めるものぢやから、それに依ていふのぢやと打聽にいうてある、〇さしあたり直ちに濃い色ぢやと、此牽牛子の花の色を見るべきではない　只花におく白露が姑くかやうに染めたばかりであるものを」といふので　其證據には忽ち色があせ變つてしまうよ、が言外、

二條后春宮のみやすむ所と申しける時に、めどにけづり花させりけるを、よませ給ひける、　ふむやのやすひで

著は草の名　削花はつくり花の事　著に削花させりは、著の莖につくり花をつけたといふのぢや

花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな

これは此著に造花をつけたさまについてよんだものぢや、〇花のさく木では

あるまいけれども、花が咲いてをり升わい　さうして見ますれば古けた木にも實が結ぶやうに、古けた此身も立身出世が出來ぬとも限りませんどうかさやうにいたしたくおもひ升　蓉は花のさくものではあるが、今はつくり花をつけたものに依て「花の木にあらざらめども」といふたのぢや、

きのとしさだ

あのぶぐさ

山高みつねにあらしのふくさとはにほひもあへず花ぞちりける

にほひもあへず」は、色に就いていふ、香氣の事ではない、○山が高くて、常平生に嵐が絶間もなく吹く山家では、咲出でゝ色がうるはしくみえるか、みえんうちに、はや花はちらされてしまうわい、

平のあつゆき

やまし

郭公峰の雲にやまじりにしありとはきけど見るよしもなき

「やまし」は、知母、又は提母、蛇母とも書く、草の名で、一名兒草といふ、歌は郭公ぢや、

○ハテ郭公は、あの峰になびいて居る雲にでも這入つてしまうた事かしらんあの方角でなくやうには聞えるけれど、形を見る事がどうもできない事よ、」

よみ人しらず

からはぎ

うつせみのからはきごとにとゞむれどたまのゆくへを見ぬぞかなしき

「からはぎ」は、韓萩ぢやらうとの説ぢや　「うつせみ」これも蟬の事をいふ、○蟬は其脱殼をば水毎に殘し留めおけども、其魂魄はどこへ往んだやらとんと行方が分らないがサ、はかなくかなしい事ぢや」といふので　これに人の上の事をよせたものである　人死すれば身體は殘り留れど、魂魄飛び去て行方がしれぬの意ぢや　偖蟬は脱殼はとゞめても、魂魄が脱けるのではない　身がぬけるのぢやけれども、今は下によせていふ人の上から、「たまのゆくへ」と姑くいうたである」　偖又一説に此「からはぎ」といふを、體源抄　源氏物語等の文を引いて、「からはぎ」はもと「からをぎ」とありしを萩を萩と寫し誤り　又歌にも「からを

きごとに」とありしを「からは。きごとに」と寫したがへしならん」といふ說がある、が、これは從はれない　もし果して、もとの歌がさやうならば、せひとも「うつせみはからをきごとに」となくては叶はぬ語調ぢや　「うつせみの。ではせひともからはきごと」といはねば叶はぬ事　吟じてみれば明かにわかる事ぢや　故に此說は用ひられない、

かはなぐさ　ふかやぶ

うばたまの夢に何かはなぐさまむうつゝにだにもあかぬこゝろを

「かはなくさ」は女菁ならんかともいへど、慥でない　これは戀歌でいうたものぢや　「うばたまの」は夢といふにかゝる枕詞　これも例のはかなく假初のといふやうなる意を含むのぢや、○はかなくかりそめなる夢にみたとて、何でそれで心を慰める事が出來やうぞ　正氣な現在の時逢うたですらも、あき足らず戀しくなつかしくおもふ心をばサ、

さがりこけ　たかむこのとしはる

花の色はたゞひとさかりこけれどもかへすがへすぞ露はそめける

「さがりこけ」は女羅ぢや　この歌は一般の花をよんだものぢや○、咲出でたる花の色合を見れば、唯其盛の一時濃くみえるやうではあるけれども　これ迄に濃き色とするには、重ね〳〵露が染めたからの事である、」といふので　つひわけもない事ではない、が言外　これも花のいろを露が染めたものとしていうたのぢや、

にがたけ　ちげはる

いのちとて露をたのむにかたければ物わびしらになく野べの虫

「にがたけ」は今いふ女竹、又は玄のめ竹ぢやとも　又は苦竹で即ちまだけぢやとも　或は菌類の一種ともいふ　これも歌は虫の事でいうたぢや、○野邊の

虫は、露を命として生存してあるものぢやけれど　露はもとよりはかないもので、頼みがたいものぢやから、物侘しさうなさまに鳴くことぢや」といふのぢや「わびしら」は、侘しさうな樣子にといふ位の詞　くはしくは皇國文法釋義にいうてある、

かはたけ

さよふけてなかばたけゆくひさかたの月ふきかへせ秋のやま。。。。

かげのりの王

風

「かはたけ」は、河竹で、即ち苦竹と同物ぢやとも、菌類の一種の名ぢやともいふ　此歌は月をよんだものぢや「ひさかたの」は枕詞、○夜が段々とふけていつて、モウ半分がた傾いたあの清いさやかな月を、どうか山へ近づかないやうに、吹返すやうにせよ、秋の山風よ、

わらび

けぶりたちもゆとも見えぬ草のはをたれかわらびとなづけそ。。。。

ぢんせい法師

めけむ

これは蕨を藥火といひなしたので、他のかくし題とはおのづから異なるよみざまぢや○烟がたちのぼつて燃ゆるとみゆるでもない草の葉であるのを誰が藥火と名づけはじめた事ぢやらう、聞えぬ名である」

さゝまつびははせをば

きのめのと

いさゝめに、時まつまにぞひはへぬる心はせをば人に見えつゝ。。。。。。。。。。。。

笹、松、枇杷、芭蕉ぢや　これは戀歌でいうたもので、初めて逢はんとする人に、已に逢ふべき事をゆるして後、空しく日を經る上からよんだものとする歌ぢや

「いさゝめに」は、ちよつとかりにといふ意の詞、○すでに逢はうと約束して、ちよつと假に折柄を待合せる間にサ、日數が立た事である　なまじひに逢はうと許した心の程をば、人に見知られた上で」といふので　こんな事なら約束せねばよかつた、が言外、

なしなつめくるみ

兵衛

あぢきなしなげきなつめそうき事にあひくるみをばすてぬ物から

梨、棗、胡桃ぢや「あぢきなし」は、はりあひなくつまらずいやな氣持の事　春上（三八）にいうた通りぢや、○つまらん無益の事ぢや、決して歎き詰める事はせぬがよい　是までたび〳〵世上の憂い事に出遇ひ來つた身をば、捨てもせぬものながら、歎くは無益の事ぢや」「つめ」は集めのつめではない、詰めの意ぢや　今も思ひつめ、言ひつめ、などいふ、古くも例ある詞ぢや、

からことゝいふところにて春の立ける日によめる

安倍清行朝臣

涙の音のけさからことに聞ゆるは春のあらべやあらたまるらむ

唐琴は備前國の地名ぢや　これは詞書の通り、實景をのべたものぢや、○此岸にうちよせる浪の音も、今朝からは別段かはつて聞えるのは、春が立つたからして、調子が改まつた故であらう」琴といふから調といひなしたのぢや、

いかゞさき

かぢにあたる涙のあづくを春なればいかゞさきちる花と見ざらむ

かねみのおほきみ

「いかゞ崎」は、近江にも河内にもあるが、これは近江のぢやといふ、○こゝの海を漕いでゆく櫂に、あたつて碎け散る浪の雫が　今は丁度春の事ぢやから、何として咲たり散たりする花ぞと見ざることを得やうぞ、全く花と見る外はない、

からさき

かのかたにいつからさきにわたりけむ涙路は跡もものこらざりけり

あほのつねみ

辛崎は即ち近江八景中の辛崎ぢや、○あゝあの人は、あの場所に何時からして、我に先立て渡つた事ぢやらう、浪路には跡が殘らないから、わからないといふので　陸ならば跡もみえやうものをが言外ぢや、

涙の花おきからさきて散りくめり水の春とは風やなるらむ

「浪の花」とは、浪の打よせて碎けちる時に、白く散るものを名づけていふのぢや、○あゝあの浪の花は、沖の方から咲いて、磯の方へ散つてくるやうすぢや　花は春に逢うて咲くものぢやが、去てみれば、水の春といふものは風がなるものでもあらうか」

かみやがは

うば玉のわが黑かみやかはるらむかゞみの影にふれる去ら雪

つらゆき

紙屋川は山城ぢや　是は歌は別ぢや　「うば玉の」は枕詞で、例の深く歎息した意の含まれるのぢや、○あゝなげかしいことぢや、我等が黑髪はもはや色がかはつたとみえる　今此鏡にうつゝた影をみれば、頭へ白々と雪がふつてをる事ぢや、

よどがは

あしびきの山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

淀川は山城ぢや　これも歌は別ぢや　「山べにをれば」は山べにをる事なるのに、といふ意ぢやといふ事は、秋上秋萩にうらびれをれば、の處にいうておいた、○人目のすくない山方に住居してをる事なるのに　かてゝ加へて白雲が、どのやうにせよとて、かやうに鳥渡も晴れる事なく立こめる事ぢやらう、といふので・さて〳〵鬱陶しい、が言外、

かた野

夏草のうへはなびけるぬま水のゆくかたのなきわが心かな

たゞみね

交野は河内ぢや　上の句は「行くかたのなき」をおこす序歌ぢや　これを身の人に去られぬ比喩として說くはよくない　さてかやうに序歌にいひつゞけたる調の上に、何となく身の不遇を歎く情もこもつて聞えるのぢや、○夏草が一般深く生茂つて居る下に、隱れてたゞようて居る沼水の　どこへ行くともなく、氣ばらしのないわしが心でもある事かいナア」心のゆかぬとは、氣が晴

れずおもしろからぬ事をいふ、

かつらの宮　　源ほどこす

秋くれど月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすばかりを

「桂宮」は宮の名ぢや　「ばかりを」のをは歎息のをでばかりぢやといふ程の辭ものをではない、○世上の樹木は、秋がくれば實を結ぶものぢやが、月中にある桂は、秋が來ても別に實は結ばない　只其月の光を花とちらすばかりの事ぢや」　月中桂の事は、秋上「久かたの月のかつらも」の歌のところでいうておいた、

百和香　　よみ人しらず

花ごとにあかずちらし〻風なればいくそばくわがうしとかは思ふ

「百和香」は、合せ香の名ぢや、歌には花の事をいうたぢや、○どの花も、どの花も、花といふ花をば、飽かず殘り多いのに、悉く散らしてしまうた風ぢやから、なんぼ程か、われらはうい恨めしいと思ふ事である、

すみながし　　あげはる

春がすみなかしかよひぢなかりせば秋くる雁はかへらざらまし

「墨ながし」は墨汁を水の上に流して、紙をそめたものをいふ　歌は雁の事ぢや「ながし」のしは強めの辭ぢや、○春霞の柵引いて居る中にサ、一すぢの通路がない事があつたならば　秋に來た雁は歸る事は出來ないであらう」といふので　鳥渡みては一面に霞んでみえるけれど、あの中に必一すぢの通路があるぢやらう、が言外ぢや　偖此「秋くる雁」といふ詞は必ず「秋こし雁」といはなくては叶はない　一説に調をいたはつたぢやとあるが、いたはるといふは、とゝのはせるのぢやが　くるではとゝのはぬものとなる　これはいづれにも誤とおもはれる、

おき火

流れいづるかただに見えぬ涙川おきひむときや底はあられむ　みやこのよしか

「おき火」は、炭をおこして火としたもので、即ちおきの事ぢや　歌は戀歌でいうたものぢや　沖とは海河に通じて深い所をいふ名ぢや、○流れ出て來る源の方でさへも見えぬ程に絶間のない涙川は　もしも沖の方が干る時が有つたならば、底の深さ淺さもしられう事であらう」といふので　されども絶間がないからつまり底はわかるまいが言外ぢや　涙川は人を思うていづる涙の事にいうたものぢや、

ちまき

のちまきのおくれておふるなへなれどあだにはならぬたのみとぞきく　大江千里

「ちまき」は粽で、昔は五月五日に用ひたものである、○後蒔とて、時節におくれて種をおろした故、後れて生へた苗ではあるけれど　しかし無用には成てしまはぬ、矢張實のりてたのみのあるものと聞く事ぢや」といふので　夫故學問を始め諸藝其外、おそく始めても、それ相當の益は得られるものぢやが言外、

はをはじめ、るをはてにて、ながめをかけて時の歌よめと人のいひければよめる、　僧正聖寶

はなのながめにあくやとて分ゆけば心ぞともにちりぬべらなる

はるといふを、歌の首尾において、さてながめといふを、其中間に入れて、時節の歌よめといはれたので　春の霖雨の比とみえると古人もいはれた、○花の滿開の中をあるいたなら、さすがに目に飽く事もあらうかとて　花を分けて行けば、飽くどころではない　却て心までがサ、花と一緒に散つてしまひさうになつた、

187
322

明治三十七年六月一日印刷
明治三十七年六月五日發行

古今集詳解卷二奥附
定價金四拾四錢

著作者　中邨秋香
東京市本郷區駒込西片町十番地

發行者　前川亦三
東京市日本橋箔屋町十

印刷者　三島宇
東京市神田區淡

印刷所　弘文
同所　電話本局二三

發所行　前川文榮
東京日本橋區箔屋町十六番地